

中国社会主義と市場経済の関係

中尾訓生

はじめに

統制経済（社会主義経済）と市場経済の共存を意図する改革政策の展開は、どのようなものとなるのであろうか。現行の統制経済に市場経済を導入していくのであるから、体制の安定を願う指導者たちが、慎重な「導入」を図らざる得ないというのは容易に察せられる。

彼ら指導者が、考慮するのはこの政策が社会秩序の安寧を脅かさないかどうかであった。

だから経済特区を創設し、人民に市場経済の与える衝撃を緩和し、市場経済に慣れさせ、学習させるという漸進的な方法を使ったのである。

市場経済の仕組みを学習するということはまず市場経済に対処する態度、精神を身につけることが前提である。市場経済の制度的仕組みを学習することは大して難しいことではない。困難は、統制経済の下で身につけている生活習慣、規範と市場経済が求める生活態度、志向を共存させることである。市場の発するシグナルを読みとることができるようになることが、肝要である。注意すべきは制度とそれを支えている人間を分離することはできないということである¹⁾。私たちは分析上それらを分離する。

市場制度の人間の態度と志向と統制経済下の人間の態度と志向については、それらは時間、空間を異にしてバラバラに存在しているのではなく、同一時間、同一平面上に存在している。

両者の共存は、主体（人民）の内部で拮抗しながら、共存が図られている。ここに共存解明の困難は、存するのである。

1) 拙著『資本主義社会の再生産と人権観念』の「7章、制度について」、制度の認識は制度を支えている人間と客体を分離することはできない。(晃洋書房, 1993)

拮抗とは市場の生み出す態度、志向と統制の態度・志向が、主体内で相争うことである。

人間の本性が、両者の態度、志向の根底にあり、これが両者を拮抗させているのである。主体内での拮抗は、主体の外に政治的・経済的表現体を産みだしている。拮抗は表現体の内に現れている。市場経済の拡勢は、この拮抗を高め、社会的、政治的不安をもたらしていくであろう。変革は、日常的には国営企業の民営化に対応する徴税、福祉政策に現出するであろう。

それは、社会主義の理念に照らしての政策の正当化を争うイデオロギー論争として顕在化する。

国営企業の民営化は、競争にうちかつために、当然生産性の上昇を意図している。これは多数の失業者を産み出すことになる。また、福祉（年金、失業保険、教育、医療…）は、国営企業の全面的負担から、民営企業の負担に肩代わりされることにならざるを得ない。

市場経済と統制経済は、その仕事の分担を求められる。分担は、決してスムーズな進行とはいかないであろう。徴税にしても福祉にしても制度の改変は、人の態度、志向の一致を前提とする。どちらか一方の態度が、相手に同化されることで拮抗は収まっていく。

すなわち中国の場合、一層の市場経済化が推進されると両者の態度、志向するところの拮抗は、小さくなっていくであろう。All or nothingの自己責任とGive and Takeの資本主義原理は、社会主義の理念、倫理を片隅に追いやることになる。

中国は、経済的には成功するであろうが、マルクスが強調したように貧富差は拡大し、貨幣中心の抽象的社会となっていく。もちろん、これは、鄧小平自身が改革の号令をかけたときに十分に認識していたことである。彼は、A・スミスを援用し、「先富論」と呼ばれるものを主張している。鄧小平が、望んだように市場経済の拡勢は、貧富差を拡大するものの物質的豊かさを人民に保障している。中国は、現在の生活水準を維持するためには、もはや市場経済化を押さえることはできなくなっている。経済先進国の位置を占める

ようになった中国は、WTO加盟によって一層の世界経済化を押し進めている。

中国は、世界資本主義に強く組み込まれて、これからは脱することはできない。

中国人民も資本主義諸国民とコミュニケーションを容易にする市場の言語を理解できるようになってきた。

本稿が、関心を寄せているのは中国の改革・開放が、新しい歴史の頁をひらくものなのか、それともただ資本主義の後を追っているだけのものなのか、どうかである。

現代社会の中心的問題は、従来からの分配問題とともに、新たに経済開発に伴う生態系の破壊という問題が加わった。中国もこの問題に直面している。今までは生態系の破壊をしながらの経済的豊かさの確保であったが、問題は、生態系を守りながら、物質的豊かさの確保が可能なのかどうかである。そのためには生態系を重視した生産構造の変革が必要となる。中国が、社会主義の理念を捨て去っていない限り、私は、これを可能にできると考えている。生態系保全のため市場に強力に介入することが求められている。

社会主義の理念は、セルフ・インタレストの私有理念よりも依然として人民には受け入れられていると思われる。

拮抗は、かかる問題を克服しながら新しい社会への動力になり得るであろうか。答えは本源的人間性が、貨幣を神とする市場経済に組み込まれるか、それとも貨幣に抵抗するかに懸かっている。

市場経済は、人民間の競争を激化し、競争は、社会を動態化する。競争は一層の市場経済領域の拡大・深化となっていく。

拮抗とは二つの立場の主体内における拮抗である。拮抗を私は、マルクスの労働の二重性論の延長線上に位置づけることができると考えている。価値実践（抽象的労働）は生態系に依存する使用価値実践（具体的労働）と対抗関係にあり、主体内において拮抗している。

●商品に表示された労働の二重性、主体内における拮抗

労働の二重性、具体的有用労働と抽象的労働が、商品に表示されているとマルクスは喝破した。この点をマルクスは、経済学批判を可能にする跳躍点であると述べている。これを巡って経済学は、発展してきたにも関わらず、誰もこれを認識することができなかつたと述べている。抽象的労働は、労働対象を価値化する労働であり、資本主義を支える労働である。具体的労働は、労働対象の具体的属性に従う労働であり、抽象的労働を批判する労働である。私は、具体的労働を社会主義を支える労働であると解釈している。具体的労働（具体的実践）は、抽象的労働（価値実践）に対抗する労働のことである。

生態系は、価値（貨幣）でなく、具体物の連鎖、食物連鎖、物質循環、エネルギー循環として表現できる。市場経済は、この連鎖を切り刻んできた。

本稿は中国社会の行方を上述の視角から考察するものである。

●市場経済と統制経済という二つの社会形態

市場とはいってもなく、商品が交換されている場である。商品交換は貨幣を介して行われている。見知らぬ人が市場で際会し、その目的を達成している。市場で際会した見知らぬ人のコミュニケーションは貨幣によって果たされている。マルクスが、終生努力した「貨幣」カテゴリーの解明は重要である。これまでも私は「貨幣論」については多くを論じてきた²⁾。

市場経済の拡大発展は商品所有者の欲望充足を動因（商品A—G—商品B）としているのではなく、G—W—Gで表示されている具体物を捨象する抽象化に困っているのである。ここでは量的差異のみが人々の関心事である³⁾。

資本主義（市場）社会の特徴は経済（社会的物質代謝）とその社会を取り纏めている関係（基本関係）が市場（商品交換）によって不可分一体となっている点である。この基本関係をマルクスは物的（貨幣）依存関係と呼んでいる。すなわち、貨幣が基本関係の表現体となっているのである。市場社会

2) 拙著 前掲書「6章、基本関係」

3) 拙稿「貨幣の資本への転化」所収『山口経済学雑誌』23巻5・6号

における人々の行動は貨幣を巡ってのものである。

経済をAと表示し、基本関係をBと表示するなら、資本主義社会は $\{A \leftrightarrow \text{商品交換} \leftrightarrow B\}$ と表現される。

AとBは市場を介して不可分一体となっている。すなわち商品交換の連続性は $W_1 - G - W_2$ ではなく、 $G - W - G$ によって果たされているのである。

これがAとBを再生している。この社会では市場＝商品交換が維持・再生していることが根本なのである。だから、この社会では文化的、政治的側面は経済によって覆われており、経済が必須の要件となっているのである。すなわち、文化も政治も経済的言語によって説明される。

非資本主義社会の特徴はその社会の基本関係B'がAを規制している点にある。表示すると $\{B' \Rightarrow A\}$ となる。

マルクスによるとB'は人格的依存の関係と言われている。人格的依存関係(B')の社会は宗教的、家父長的、軍事的、政治的権威によってその社会が取り纏められているのである。統制経済社会とはいうまでもなく、 $\{B' \Rightarrow A\}$ として表示される。統制社会の再生産はB'の維持・再生に懸かっている。この社会では宗教、儀礼、大衆集会を通じて政治的権威が育成されている。経済的貧困は、直接的には体制の根幹を揺るがすことはない。

権威を育成するための神殿や寺院の建築に資材を投入することができるのは指導者の権威が社会的に受容されている程度に依る。B' \Rightarrow Aの下では権威の程度に因って剰余がまず決定される。

剰余(＝総生産物－労務費)の増減は労務費の増減で決まる。労務費の大きさは弾力的となっている。すなわち、必要とされる剰余が、まず決定される。仮に餓死者が1,000人、あるいは2,000人でも社会の危機には直結しない。危機に至るのは主体次第である。

私は、ハバーマスの「危機」カテゴリーを援用している。彼は云う。社会科学の危機概念をえるためには、体制統合と社会統合の間の連関を把握すること、社会統合は発言し行動する主体を前提にしている、体制統合は自動制御システムを問題にする。システムは制御の作動という視点から体制にアプ

ローチするのであるが、体験世界という相からみると規範的構造を問題にする。客観的状況が危機に至るかどうかはそれが主体を經由し、再構成された客観的状況に同化する程度に依存している⁴⁾。すなわち体制の自動制御システムの円滑な作動に障害が生じても体験世界の相においてその障害を説明し得る限り、危機には至らない。体制統合の危機は、体験世界を經由して、すなわち体制についての正統化解釈を通じて危機を現出させる。

資本主義社会では体制統合と社会統合は、直結していない。

そうであるが故にこの社会は危機に対して弾力性を有し、強いのである。

体制統合と社会統合の弾力性について私が、「実践と正当化解釈の乖離」ということで説明したことである⁵⁾。

現実の中国社会主義社会は、資本主義と非資本主義の混合、市場経済化を目指している。

図示すると $\{B' \Rightarrow A \Leftrightarrow \text{商品交換} \Leftrightarrow B\}$ である。この混合社会の問題は、B' とBの拮抗にある。B'にウエイトが移ると統制経済、Bに移ると個人経済が勢いを増していく。前述しているB'とBの拮抗は、文化、思想、政治問題を惹起している。経済に関連して見ると、かかる問題は、生産手段、生産物の管理を巡って提示されている。

中国社会に不安定が生じるとするとそれはB'の維持・再生を巡ってのものであろう。

伝統的生活様式は、経済発展とともに縮小されるであろうし、おそらく非合理的生活様式として廃されていくであろう。つまりB'は、Bに同化・順応されていく。

しかし社会主義社会の特性を放棄するならいざしらず、社会主義の存在根拠を保持せんとするならB'とBの対立は、簡単には解消されないであろう。この対立は、政治的対立として顕現するであろう。

4) J・ハバーマス 「晩期資本主義における正統化の諸問題」 細谷・訳、岩波書店

5) 拙著、前掲書 「5章、実践の解釈、実践の表現体、表現体系」を参照してもらいたい。

●基本関係 {物的依存関係B, 人格的依存関係B'} について

基本関係とは社会構成員が同化するところのもの、彼らがアイデンティティを感得するところのものである。彼らの志向するところ、行動を規制しているところのものが基本関係である。資本主義社会では彼らの志向するところ、行動は貨幣に支配されているのである。

ただし彼らは自分自身が貨幣に支配されているとは思っていない。そうであるからこそ、彼、彼女は無味乾燥な貨幣をロマン主義的に解釈し、貨幣にアイデンティティを感得するのである。

彼らは、貨幣を従えて、貨幣から解放されて自由に行動していると感じている。

自由主義は、市場社会の金科玉条である。

貨幣に支配されているということはコミュニケーションを規制しているものが貨幣であるということである。このとき、貨幣は基本関係となっているのである。これは、マルクスが、「アテネのタイモン」で読みとったものである⁶⁾。

非資本主義社会であるなら、例えば封建制度下の日本では「家」が彼らを結びつけていた。

「家」が日本人の中心にあった。武士の守るべき倫理は「家」の存続を図ることであった。

この頂点に天皇家が聳えていたのである。日本社会は天皇家によって秩序を与えられていた。B'の世界である。

中国では共産党が権威の中心にある。共産党は、各人が自己の社会的実践を正当化するとき依拠するところのものであり、基本関係を表現している。共産党が、正当化の役割を果たし得なくなると社会主義社会は、政治的危機に陥ることになるであろう。

共産党の市場への介入抑制は、人々の利己心を解放し、経済を活性化させ、

6) K・マルクス 『経済学・哲学草稿』 194頁, 藤野・訳, 国民文庫

経済発展をもたらした。しかし経済発展が、共産党への信頼を増進させているかどうかは疑問である。

むしろ共産党体制を脅かす決定的問題を生み出す可能性がなくもない。

それは市場経済を担う現実の人間と社会主義が期待する人間との乖離が拡大していくからである。彼らは、口では社会主義の理念を唱えながら、現実には貨幣増殖に明け暮れる。

社会主義の理念が、貨幣増殖の行動を正当化し得なくなってくると共産党を中心にした基本関係は動揺してくる。B'とBの拮抗が尖鋭化してくる。

これまでも、おそらく今後も改革開放政策はB'をBに適應させるかたちで行われていくであろう。即ち市場経済化の推進を意図している。

第16回共産党大会は党執行部の一大決心を示している。それは共産党の危機の現れとも読みとれるし、逆に自信の現れともみることができる⁷⁾。

私営企業家、自由業者の共産党への入党を容認したことは労働者階級の前衛政党という共産党の看板を外したことを内外に宣言したわけである。もちろん私営企業家も共産党の権威が、保身となり、また経営に力を発揮することをよく知っている。

7%成長の持続を意図する中国指導部は、彼らの能力を無視することはできなくなってきたということである。企業の行動原理は、G-W-G'となり、つまり利潤が尺度となり、社会主義イデオロギーは不要となる。党も実務家、テクノクラートによって運営されるようになり、社会主義イデオロギーは不要となる。社会主義理念は、経済成長のなかに封じ込められる。

しかしながら、共産党指導部が乗り越えなければならないハードルは厳として存在している。この点を次節で述べることにする。

7) 江沢民の三つの代表思想で党の方向性を権威づけている。「党が先進的な生産力、文化、最も広汎な人民の根本的利益を代表」するというもの。秋石「一つの偉大な思想の誕生」(翻訳・張文芳)所収『求是雜誌』2002・21

●社会の再生産について

社会の再生産とは {B'とA} {BとA} が、維持・再生することである。

非資本主義社会 {B'⇒A} の再生産は基本関係B'を表現している権威を再生・維持することに懸かっている。B'を貨殖から防護するためには文化的、政治的力を動員してB'を強固にしなければならないであろう。

資本主義社会の再生産は、商品交換の継続・連続性を維持することに懸かっている。

A (社会的物質代謝) は、商品交換を通じて遂行されている。Bは商品交換によって日々維持されている。商品交換連続性の断絶が、マルクスのいう政治的、経済的危機である。

表示しているようにBは、市場経済の拡大とともに維持・再生するのであるが、B'は意識的に維持・再生しなければならない。今日では金王朝の北朝鮮社会が、典型的事例であろう。映画、マスゲームによる大衆動員、密告、暴力によるB'の維持である。北朝鮮金王朝は、イデオロギー装置と暴力装置を駆使して体制維持に、つまりB'の強化に励む。

資本主義社会と非資本主義社会の決定的違いは明らかであろう。

資本主義社会では基本関係は無意識的に形成されており、秩序は維持される。非資本主義社会では秩序維持のために基本関係を意識的に形成しなければならない。資本主義の行動原理はセルフインタレストの個人主義である。A・スミスはセルフインタレストは神の見えざる手によって社会的調和をもたらすと説明した。この行動原理は市場の行動原理であり、商品交換者はこれを無意識的に実践している。市場経済システムは、システムの外から基本関係を維持するイデオロギーを注入することはない。ルイ王朝の復活を意図したケネーの政策は、異なった二つの立場に立脚している。一つはルイ王朝の権威、一つは市場経済である。市場経済のスローガンであるレセ・ヘール、レセ・パッセ (Lesse Faire, Lesse Passe) は、ルイ王朝の権威を浸食していくものであった。重農主義者は、この結末を意識していなかったのであるが。日本の封建制度の維持・再生は、将軍 (武士の頭領) の権威 (士農工商の

身分制度)を日々、家臣、庶民に注入することで果たされていた。

武士の権威は「家」によって保たれていた。家制度の存続に結果する諸々の儀式、慣習が封建制度を支えた。武士の権威は、天皇の権威によって補強されていたのである。

●秩序について

Bの表現体は貨幣である先に論じた。ここで明らかにしておかなければならないことはBが商品交換の成立にとって必要な観念と不可分一体であるという点である。

この観念は私有財産の不可侵であり、契約の自由であり、職業選択・営業の自由である。

これらは経済的自由と一括できるであろう。

経済的自由は人権観念に含まれているものであり、資本主義の行動原理であるセルフ・インタレストと共存する。この観念は経済発展を促すように固定的ではなく、弾力的に解釈されていく。

労働権や、社会権も人権規範の内に取り込み可能であれば認められた。これらの権利は当初、市場原則である等価交換、自由平等な交換を否定するものと考えられたが、等価交換、自由平等の意味を拡大して市場システムを支えるものとして取り込まれた。

経済的自由に対して政治的自由に一括し得る人権も存在する。これは思想・信仰の自由、表現・結社の自由、法の前の平等、等々である。

秩序が、動揺してくると政治的自由は抑制される。「自由」の本家を自認しているアメリカでも、日本でも、中国においても秩序が脅かされると判定されると政治的自由は抑圧される。アメリカが対テロ戦争を宣言したとき、民族主義が喚起され、政治的自由は抑圧されていた。経済的自由の抑制は、市場経済の停滞をもたらすであろうが、政治的自由の抑制と市場経済の活性化は、共存する。

戦前の日本の社会構造は、BとB'の対抗として説明できる。

図で表示すると $\{B' \Rightarrow A \Leftrightarrow \text{商品交換} \Leftrightarrow B\}$ となる。B'は、天皇の權威によって成立している。社会が不安定になるとB'が強化され、経済は統制されていった。

社会主義市場経済の問題点は、既述しているように社会主義という政治システムと市場経済システムの対抗から生じる。市場経済の拡大は社会主義の倫理を否定する拝金主義に結果する。

資本主義の本質はマルクスが資本主義の最高権力を貨幣と喝破した200年前と変わってはいないのである。B'とBの対立は社会主義の倫理と市場倫理の対抗である。

個々人にとって経済的自由と政治的自由を区別することは出来ない。市場で自由を感得すると当然、人々は政治的自由を求めることになる。

前衛政党的看板を外し、国民政党的形を整えていく以上、市場で経済的自由を享受してきている彼らの政治的自由への欲求を押さえ込むことは困難になるであろう。

党の指導の下での政治的自由は早晚乗り越えられるであろう。市場の人間は、ブルジョア民主主義の根幹である複数政党制を要求することになるであろうが、党の指導部は、自己の権力基盤を崩壊させることになるこの要求は容認しないであろう。

●基本関係Bは貨幣を表現体としている

前述しているように貨幣という無機質で抽象的なものが、人々を結合し、取り纏めるものに如何にしているのか⁸⁾。

これは、解釈と実践の乖離によって果たされているのである。換言すると主体内の拮抗は、この乖離によってバランスが保たれている。主体内のバランス保持は、社会の安定に通じている。乖離度が、ある点を超えると政府はイデオロギーと暴力に訴えることになる。

8) 拙著、前掲書 143頁 実践を居心地を良くするように解釈することで仮の、一時的に精神的慰安を得る。実践と解釈の乖離が拡大していく。

実際は無機質抽象的存在である貨幣がロマン主義的に解釈される。貨殖に走る猛烈社員も妻や子どものために、家庭のために働いていると心を慰める。友人、同僚との貨殖の競争は、孤独感をつのらせるのみならず、精神的飢餓をもたらす。実践と正当化解釈との乖離である⁹⁾。

●個人主義と連帯主義

社会主義規範＝連帯主義の重要性

経済発展の負の側面である生態系破壊に私たちは直面している。生態系破壊は今日放置できない問題である。生態系破壊をくい止めるにはG-W-G'を善とする見方、態度を変えなければ不可能であろう。環境という公共財(大気、河川、海洋、土壌、森林)を損傷しないためには、これの使用にコストを支払わなければならない。私有財産の不可侵という観念に浸されている市場経済では生態系を大切に使用するという事はできない。

利己心に立脚する資本=G-W-G'と公共財の確保が対立するからである。

拮抗は、利己心の個人主義を協調の連帯主義に転換することで克服される。

生態系の空間は私的所有によって区画されているのではないから、生態系保全の意識を涵養することがなによりも重要なのである。

市場と生態系の保全を両立させるのは社会主義の理念＝連帯主義が有効であろう。

利己主義に依拠した市場経済が、今日の生態系破壊をもたらしたのであるから。

拮抗は、社会を抽象化(価値化)する見方と具体化する見方の対立である。彼、彼女がどちらの見方を優先するかは主にその人の教育・生活環境に依存するであろう。

バランスのとれた拮抗、ライフ・スタイルというものが、考えられるであろうか。

9) 拙稿「市場のもたらす精神的飢餓と孤独」 山口経済学雑誌, 50巻6号

ミッチェル、オルグビー、シュウォーツを紹介しておこう。

彼らの云う外部指向型人間、内部指向型人間と云う分類は、私の価値実践者と使用価値実践者と解することができるであろう。

現在、私たちに与えられている課題は、価値実践によって生態系という容器、つまり私たちが生かされている場の破損があちらこちらで目立つようになってきたことへの対処である。既述しているように価値実践によって支えられている社会では彼、彼女は、価値実践と使用価値実践を拮抗させて生活している。彼、彼女は、価値実践の行き過ぎをA・スミスの云う胸中の公平な観察者に相応するであろう使用価値実践者の視点からチェックする。抽象化の見方と具体化の見方のバランスは新しい人間を必要とする。

ライフ・スタイルによって分類された生態系に対する姿勢を明らかにしているミッチェル、オグルビーらの整理を紹介しておく。

生態系の保護は、統合型の彼、彼女によって果たされるであろうと云うのである¹⁰⁾。

環境、生態系に対する姿勢

外部指向型	内部指向型
自然よりも人間を重視	人間よりも自然を重視
環境的関心は少ない	環境への過度の関心
環境臨界域未認識	臨界域急迫または通過
弾力的環境	脆弱さ認識
行動／切迫していない	行動／きわめて切迫
孤立的意義	一次的意義
統合型	
自然における人間	
適正な関心	
臨界域防衛	
脆弱さに保護の手	
行動／それほど切迫していないが、より多く実行	
多次元的结果	

私は外部指向型と内部指向型が、主体内でバランスしたものとして統合型スタイルが存在していると解釈している。

外部指向型と内部指向型は、拮抗しながら統合に至る。統合型のライフ・スタイルは、達成されるであろうし、達成されなければ成らない。容器の破損という外的環境が、彼、彼女にライフ・スタイルの統合型への転換を要請するのである。統合型の人間は、人類の存続を想定する限り、必ずや体勢を占めることになるであろう。

私は、ミッチェル、オルグビーらのスタイルを「市場」カテゴリーで照射している。

価値実践は市場経済を支えている実践である。価値実践は、実践の対象的諸条件を価値化し、その具体的属性を捨象する実践である。

使用価値実践は、価値化の抽象的実践を批判克服する実践である。実践の対象的諸条件の具体的属性に従う実践である。この実践は生態系に照応する。この実践は人間の本源性に依拠した実践である。

●マルクスの「価値形態論」で基本関係Bの構造を説明する

市場の人間（上衣の所有者甲と亜麻布の所有者乙）の結合は、次の如くである。

この結びつきは「上衣1着は亜麻布20エルレに価する」と表現される。

この表現の意味は、上衣の価値は、亜麻布の具体的肉体で表示されるということである。

「亜麻布20エルレは上衣1着に価する」とも表現される。

この表現の意味は、亜麻布の価値は上衣の具体的肉体で表示されるということである。

10) アーノルド・ミッチェル, ジェームズ・オグルビー 『パラダイム・シフト』 吉富・訳
TBSブリタニカ, 『VALS Typology』 by Arnold Mitchell, James Ogilvy
内部指向型, 外部指向型, 統合型で彼らは, 個人性向, 社会制度, 生活システム, 生態系に対する解釈, 態度を示している。140—142頁。

上衣は、亜麻布を価値の表現体として取り込む。

亜麻布は、上衣を価値の表現体として取り込む。

上衣も亜麻布も価値体として自己主張する。全ての商品が、同様の主張をするわけであるから価値形態は、完結し得ない。完結は、一つの商品を価値の表現体として析出すれば完結する。これが、貨幣であり、金はその位置を占める。

全ての商品によって価値の表現体として金が析出されたのであるが、ここで他商品と金の立場が逆転し、金が、他商品の主人となる。他商品は、金を介してのみ自己主張できる。

かくして貨幣は、市場のコミュニケーションの道具となる。

貨幣は、商品所有者が商品所有者である限り、単なる道具ではない。それは商品所有者の内部にしみ込んだものである。

商品所有者が、コミュニケーションの道具（貨幣）を自由に取り替えることはできない。

市場は、全ての意味を抽象化し、量に還元してしまう。市場を経由するのは具体性を捨象され、無差別一様に量化されてしまう。だからこそ市場経済は、勢いよく発展する。

市場では互いの欲求が充足されるというところに商品交換の動因があるというのではなく、それは具体物の抽象化にある。

市場経済の動因は、既述の如き矛盾を孕んだ商品所有者間の関係、すなわち基本関係にある。市場経済の発展は、根本的にはこのような構造に依っているのである¹¹⁾。

それでは市場経済の発展には壁は存在しないのであろうか。

市場経済の壁は、生態系の破壊である。生態系は、人間社会の容器のようなものである。

すなわち、容器の破壊は、人間の存立を許さなくなる。生態系破壊は、利

11) 拙著、前掲書「6章、基本関係」

己心に基づく市場の人間によってもたらされたものである。したがって生態系の破壊をくい止めるには市場の人間を具体性を尊重する人間に置き換えることが求められる。つまり価値実践を使用価値実践に転換することである。つまり資本主義の基本関係を変質させることである。

セルフ・インタレストの資本主義に対抗する連帯主義に立脚した社会主義によって生態系破壊をくい止めることができる。連帯主義による利己主義の克服である。

社会主義の理念は、連帯による全体主義である。

市場経済が、私たちにもたらした豊かな生活は、換言すると素材の浪費によって与えられている。リサイクルは、明らかに資源の節約となるが、利潤削減を来す場合、リサイクルは実行されない。

市場経済と社会主義経済の関連をその影響を受けている彼、彼女の態度、志向から論じてきた。特に彼らに影響を与えている生態系破壊に市場経済と社会主義経済の対処について論じている。

本稿は2002年4月、人民大学で開かれた国際マルクス主義学会での報告に加筆、修正したものである。